

# 属詞の位置における複合定名詞句の 指示性について

古川直世

## §0. はじめに

本稿はつぎのような型の属詞構文を研究対象とする。

- (1) Paris est la capitale de la France. (Ducrot, 1972)
- (2) Marie est la plus belle femme du monde. (Kleiber, 1987)

(1), (2)のような定名詞句をふくむ属詞構文に関しては、互いに関連しあう二つの論点がある。一つは、この型の文が  $a=b$  の等式関係にある文であるのか否か、という論点であり、もう一つの論点は、属詞複合定名詞句が指示対象をもつか否か、ということである。後者の論点は、定冠詞の本質的な機能が指示機能にあるのか、あるいは、Ducrot (1972), Kleiber (1981, 1983) 等が主張するように、存在前提にあるのか否かという、より一般的な論点につながっている。これらの問題における立場決定の相違は、定名詞句の指示対象 (réfèrent, objet de référence) の概念の捉え方の相違に帰するように思われる。しかしながら、概念の捉え方の相違に起因するという理由をもって、これらの論点がすれちがいの議論の対象である、とすることはできない。まさに、論点を論点たらしめるものは、定名詞句の指示対象の概念の捉え方の妥当性を問うことなのである。

本稿の目的は、つぎのような主張をすることにある。

- (i) 文(1), (2)は、 $a=b$  の等式関係にある文である。
- (ii) 定名詞句は、主語の位置であれ属詞の位置であれ、指示対象をもっている。
- (iii) 定冠詞の本質的な機能は、指示機能にある。しかし、この主張は、定冠詞の機能が存在前提にあるとする主張と矛盾しない。したがって、定冠詞の機能が指示作用にあるのか存在前提にあるのか、という論点は、二者択一的な決定を要求する性質の問題ではない。

(iv) 定名詞句の指示対象の概念は、二つのレベルにおいて考えるべきである。一つは、言語内のレベルであり、このレベルにおいては、たとえば *la capitale de la France* は、「フランスの首都」という意味内容を指示対象としている。もう一つは、言語外のレベルであり、このレベルにおける指示対象は、パリという具体的な都市である。Ducrot (1972) 等の論理的なアプローチにおいて指示対象という場合、後者の言語外のレベルしか考えられていないと思われるが、指示対象の概念は、言語外のレベルの指示対象のみにかぎるべきではない。定名詞句には、言語表現としての意味内容という言語内のレベルにおける指示対象がみとめられるからである。

(v) Kleiber (1981) は、定名詞句によって指示力 (*force référentielle*) の違いがあることを主張しているが、定冠詞に先立たれた名詞句であるかぎり、名詞句全体の指示性は一定していると考えべきであり、ことなるのは、定冠詞をのぞいた部分の記述力 (*force descriptive*) であるとすべきである。

## §1. Ducrot (1972), Kleiber (1987) における主張

定冠詞に指示機能のみとめることを拒否し、唯一物存在前提の表現こそ定冠詞の一定した機能であるとする Ducrot (1972) は、文(1)に関して、つぎのように述べている。

「この例に関しては、*la capitale de la France* に指示機能のみとめることは全く不可能であるように思われる。指示機能がみとめられないにもかかわらず、「フランスはひとつの、唯一つの首都をもっている」という存在の指摘は、いささかも損なわれることなく、(一定して) みとめられるのである。唯一性の指摘は、多くの場合、あまりはっきりしていないが、このタイプの文では全く明瞭である。というのは、つぎのように言うことはないと思われるからである。《*Paris est la ville de France qui dépasse le million d'habitants.*》。ただし、話し手がフランスで人口百万を越えている都市はパリだけであると信じているか、あるいは聞き手にそう信じさせようとしている場合は別である。唯一性の指摘をさけるためには、不定冠詞 *un* が必要になってくる。」<sup>(1)</sup>

Ducrot のこの主張を支持する Kleiber は<sup>(2)</sup>、Furukawa (1986) に対する書評 Kleiber (1987) においてつぎのように述べている。

「第六章において、N.F. は、定冠詞と不定冠詞を定義して、それぞれ、指示機能をもつ冠詞、記述機能をもつ冠詞とすることを提案している。定冠詞の機

能は指示機能にありとするすべての主張同様、N.Fは Paris est la capitale de la France の型の発話に立ち向って、この型の文が記述的文ではなく、 $a=b$ の形の指示の同一性を主張する文であることを証明しなければならない。後者の文においては、動詞 être は、記述的、述語的な繫合動詞としてではなく、等式関係をあらわす繫合動詞として機能していることになる。N.F.の証明は、われわれの同意をかちえない。われわれの立場を正当化するには、Marie est la plus belle femme du monde のような反例をひとつ挙げるだけで十分である。この場合、定冠詞が指示機能をもち、指示の同一性をあらわす文である、と主張することは困難である」<sup>(9)</sup>

以上の Ducrot (1972) および Kleiber (1987) の引用からあきらかなように、問題は、まず、つぎの二つの文

(3) Paris est la capitale de la France. [= (1)]

(4) Marie est la plus belle femme du monde. [= (2)]

が、 $a=b$ の型の文であるか否か、ということにある。この問題に関する筆者の主張を述べることから始めよう。

## § 2. Paris est la capitale de la France は $a=b$ の型の文である

(3)および(4)の文が  $a=b$  の型の文であるという主張は、主語名詞句と属詞名詞句を入れ換えた文(5), (6), 属詞名詞句を主題の位置においた文(7), (8),

(5) La capitale de la France est Paris.

(6) La plus belle femme du monde est Marie.

(7) La capitale de la France, c'est Paris.

(8) La plus belle femme du monde, c'est Marie.

が完全に文法的な文である、という論拠をもってなすことができる。ここで重要なことは、文(5)-(8)が  $a=b$  の型の文である、ということである。このことは、つぎのような手順によって、理解されるであろう。まず、属詞の位置にある固有名詞 Paris, Marie が、属詞の位置にあるが故に指示対象をもたない、と主張することは不可能であろう。このことは、Ducrot および Kleiber も容易にみとめることであると思われる。つぎに、主語および主題の位置が指示的な位置であることは周知のことであり、したがって、これらの位置にある定名詞句 la capitale de la France, la plus belle femme du monde が指示対象をもつことは疑いを入れないことである。この場合、la capitale de la France, la plus

*belle femme du monde* が指示対象としてもつものは、それぞれ *Paris, Marie* であると考えすることはできない。なぜならば、つぎの文、

- (9) *Paris est Paris.*
- (10) *Marie est Marie.*
- (11) *Paris, c'est Paris.*
- (12) *Marie, c'est Marie.*

は、トートロジーの文であるか、意味のことなる文であるからである。以上のことから、文(5)-(8)における主語名詞句あるいは主題名詞句の指示対象と属詞名詞句の指示対象がことになっていることは、あきらかである。文(5)-(8)は、まさに、主語名詞句あるいは主題名詞句の指示対象と属詞名詞句の指示対象とが等式関係にある、ということをも主張する  $a=b$  の型の文なのである。ここで指摘しておかなければならないことは、二つの項が等式関係にあるためには、二つの項の指示対象が別々でなければならない、という一見逆説的なことである。

文(5)-(8)が  $a=b$  の型の文であることをみとめるならば、問題の文(3)-(4)もまた  $a=b$  の型の文であることをみとめざるをえないであろう。なぜなら、定名詞句 *la capitale de la France, la plus belle femme du monde* は、主語の位置でもっていた指示対象を属詞の位置においても保つ、と考えてならない理由は全くないからである。

### §3. 言語表現のレベルと解釈のレベル

それでは、なぜ Ducrot, Kleiber は、文(3)-(4)は  $a=b$  の型の文ではないという誤った主張をするに至っているのであろうか。それは、おそらく、言語表現のレベルと解釈のレベルとの混同に原因があるように思われる。より具体的に言い直せば、属詞名詞句と *être*+属詞名詞句との混同というきわめて単純な理由に原因があるように思われるのである。筆者の考えでは、文(3)-(4)は、言語表現のレベルでは、あくまでも  $a=b$  の型の文であり、解釈のレベルにおいて、主語名詞句 *Paris, Marie* に対して属詞名詞句をふくむ動詞句 *est la capitale de France, est la plus belle femme du monde* が述語として解釈される、と考えられるのである。<sup>(4)</sup>

たしかに、解釈のレベルでは、パリとフランスの首都が同一であるとか、マリと世界一の美女が同一であるという面倒な解釈をする聞き手はいないであろう。おそらく、文(3)-(4)は、つぎのパラフレーズで示しうるような解釈を受けるで

あろう。

- (13) Paris {a la propriété d'être/se caractérise comme étant} la capitale de la France.  
 (14) Marie {a la propriété d'être/se caractérise comme étant} la plus belle femme du monde.

しかし、注意しなければならないことは、このような解釈を受けるからといって、定名詞句 *la capitale de la France*, *la plus belle femme du monde* そのものが記述的 (attributif) あるいは述語的 (prédicatif) であると考えてはならない。記述的あるいは述語的であるのは、定名詞句そのものではなくて、être+定名詞句なのである。*la capitale de la France*, *la plus belle femme du monde* という定名詞句そのものは、それぞれ、《フランスの首都》、《世界一の美女》という意味内容を指示対象としているのである。したがって、言語表現のレベルでは、あくまでも、主語定名詞句 *Paris*, *Marie* が指す具象物としてのパリ、マリという指示対象と属詞定名詞句 *la capitale de la France*, *la plus belle femme du monde* が指す意味内容《フランスの首都》、《世界一の美女》という指示対象とが同一である、ということを示す形になっているのである。

定名詞句がその意味内容を指示対象としうるということは、つぎの引用が示すように、Kleiber (1981) 自身、定名詞句における記述的用法と指示的用法の区別に関連して、主張していることである。

「したがって、われわれは定表現の記述的用法を定義して、一つの定表現が意味する性質「何々」を指示するために話し手がその定表現を用いる場合であると、指示的用法を定義して、一つの定表現に合致する個体を指示するためにその定表現を用いる場合である、とする。どちらの場合も定表現は、指示するために用いられているのである。指示の対象が変化するのである〔下線古川〕。記述的用法の場合には、指示の対象は、定表現そのもの、すなわち、唯一性存在前提によって構成されている。指示的用法の場合には、指示の対象は、問題の定表現に合致する基本的な個体あるいは一次的な個体になる。」<sup>(5)</sup>

Kleiber (1981) は、定名詞句がその意味内容を指示対象としうることを主張しているのであるから、問題の文(3)-(4)における主語名詞句 (*Paris*, *Marie*) と属詞名詞句 (*la capitale de la France*, *la plus belle femme du monde*) は、それぞれ別々の指示対象をもちうることをみとめていることになる。とすれば、Kleiber は、文(3)-(4)が、主語名詞句と属詞名詞句の指示対象の同一性をあらわす  $a=b$  の型の文であることをみとめざるをえないのである。

この段階で Kleiber が文(3)-(4)を  $a=b$  の文であると認めることに躊躇しているとするれば、その理由は、推察するに、主語名詞句 (Paris, Marie) の指示対象が具象物であり、属詞名詞句 (la capitale de la France, la plus belle femme du monde) の指示対象が抽象物であるという、性質あるいはレベルの異なる二つの指示対象の同一性を問うことに躊躇しているからではないかと思われる。この推察がそのとおりであれば、Kleiber の躊躇は無用の躊躇である。§2において指摘したように、一見逆説的なことながら、二つの項が等式関係にあるためには、二つの項の指示対象が別々でなければならないと考えられるからである。二つの項の指示対象が別々でなければ、トートロジーの文にならざるをえないであろう。事実上、文(3)-(4)はトートロジーの文ではないのである。

Kleiber は、定名詞句の意味内容、彼の言葉によれば、性質 (propriété) が指示対象になりうることを主張しながらも、他方において、この主張とは異なる思考である、指示対象をもっぱら言語外の対象物 (objet) にかぎっている論理的な思考の影響を受けているように思われる。このことは、Kleiber (1983, p. 103) が  $a=b$  の型の文として、つぎのような文をあげていることから推察できる。

(15) Pierre X est le juge de touche dont je t'ai parlé.

文(15)における属詞名詞句は、言語外の対象物の具体的なイメージを喚起するように思われる。この文は、もちろん、筆者の考えでも、 $a=b$  の型の文であるが、 $a=b$  の型の文は、このような直観的に分かりやすい例にかぎらないのである。

さて、この言語表現のレベルと解釈のレベルの混同は、Riegel (1985) にもみられる。

「まず、つぎのような発話、

35) Mon voisin est le champion du monde d'haltérophilie.

は、二つの解釈を許す。どちらの解釈においても、つぎのように二つの名詞句を入れ換えることが可能である。

36) Le champion du monde d'haltérophilie est mon voisin.

実際、35)と36)は、二つの名詞句が同じ指示対象をもっているということを意味することができる。この場合、これらの文は、共通のパラフレーズとして、つぎのような二項間の指示的等価性を明示的にあらわす発話に代えることができる。

37a) Mon voisin et le champion du monde d'haltérophilie sont une seule

et même personne / ne font qu'un.

- b) Le champion du monde d'haltérophilie n'est autre que mon voisin /  
 Mon voisin n'est autre que le champion du monde d'haltérophilie.

もう一方で、35), 36)における動詞句は、est russe, s'entraîne dix heures par jour, ne suit pas de régime のような述語的表現と同様に、主語を特徴づけるものとして解釈されうる。]<sup>(6)</sup>

Riegel は、引用文中の35)が二つの解釈を許すと述べているが、通常の意味で、聞き手にとって二通りにあいまいであるとは到底考えにくい。Riegel の言う第一の解釈と第二の解釈は、それぞれ、本稿において区別する言語表現のレベルと解釈のレベルに位置づけられるべき区別である。また、Riegelによれば、どちらの解釈においても二つの名詞句を入れ換えることが可能であると述べているが、交換可能であるのは、Riegel の言う第一の解釈においてのみである。Riegel の言う第二の解釈においては、動詞句 est le champion du monde d'haltérophilie は一つのブロックをなす述語として解釈されるわけであるから、動詞句中の定名詞句 le champion du monde d'haltérophilie は取り出されないからである。

また、Riegel は、引用文中の例文35), 36)において主語名詞句と属詞名詞句が同じ指示対象をもちうると述べているが、mon voisin, le champion du monde d'haltérophilie という表現のことなる二つの定名詞句が、属詞構文において、同じ指示対象をもつということはいえぬ。もし同じ指示対象をもつとすれば、例文35), 36)はトートロジーの文になってしまうからである。主語名詞句と属詞名詞句が同じ指示対象をもちうるとする、Riegel の指示対象の概念の捉え方には、言語内のレベルの指示対象が言語外のレベルの指示対象と、いわば対等な資格で存在することの認識の欠如がある。このことについて、以下、論じよう。

#### § 4. 定名詞句がもつ言語内のレベルの指示対象と言語外のレベルの指示対象<sup>(7)</sup>

上で引用した Riegel (1985) における言語内のレベルの指示対象に対する認識の欠如は、つぎに引用する個所にもみとれる。Riegel (1985) は、つぎの二文について、

- (16) a. Le cerveau est le siège de l'intelligence.

## b. Le siège de l'intelligence est le cerveau.

つぎのように述べている。

「定表現 *le cerveau* の名詞は、そのコード化された指示対象を直接的に、あいまいさを伴わずに、同定するのであるが、複合的な定表現 *le siège de l'intelligence* の方は、指示対象が複数個可能であるので〔下線古川〕、定表現 *le cerveau* が同定する指示対象に付与される性質であると考えざるをえない。」<sup>(8)</sup>

Kleiber (1981) は、定名詞句の性質 (*propriété*) が指示対象になりうることを主張しながらも、属詞の位置にある複合的な定名詞句の指示対象については、Riegel (1985) と同様に、言語外のレベルの指示対象しか考えていない。このことは、文、

(17) *Le nombril est le centre de l'individu.*

について、つぎのように述べていることからあきらかである。

「*le nombril* の指示対象が何であるかは、予め分かっているが、*le centre de l'individu* という表現の場合はそうではない。この表現の場合は、複数個の指示対象、すなわちトークンが可能である〔下線古川〕。このことは、*Quel* をつけた質問が可能であること (+ *Quel est le nombril?* に対して、*Quel est le centre de l'individu?* が可能)、および *quel qu'il soit* という表現を従えうること (+ *Le nombril, quel qu'il soit, ...* に対して、*Le centre de l'individu, quel qu'il soit, ...* が可能) ことによってあきらかである。」<sup>(9)</sup>

このように Riegel, Kleiber は、*le siège de l'intelligence, le centre de l'individu* のような複合的な定表現の場合、複数個の指示対象が可能であるとしているが、すくなくとも彼らがあげている属詞構文においては、それぞれ、「知性の座」、「人体の中心」というただ一つの指示対象しかもっていない。この「知性の座」、「人体の中心」というただ一つの指示対象は、言語内のレベルの指示対象である。Riegel, Kleiber のいう複数個の可能な指示対象は、言語外のレベルの指示対象である。たとえば、「人体の中心」といっても臍であるとはかぎらないという意味で、指示対象が複数個可能であるというのであろう。しかし、このような意味での指示対象は、まさに文全体が意味するところのものである。「臍が人体の中心である」あるいは「人体の中心は臍である」という意味あるいは情報は、文(17)全体が伝えるところのものであって、*le centre de l'individu* という定名詞句が伝えるものではないのである。したがって、文(10a)に関しても、Riegel の分析のように、属詞定名詞句 *le siège de l'intelligence*



の指示対象が複数個可能であるという理由をもって、その指示対象を主語名詞句に求めるような分析をしてはならないのである。

定名詞句の指示対象に関して、Riegel, Kleiber が言語外のレベルの指示対象しか考えていないことの誤りを指摘し、この誤りが、属詞構文の分析における名詞句のレベルと文のレベルの混同につながっていることを示した。この名詞句のレベルと文のレベルの混同は、前節で述べた言語表現のレベルと解釈のレベルの混同と同根である。それでは何故、Riegel, Kleiber が、le centre de l'individu の型の複合的な属詞定名詞句に対して言語外のレベルの指示対象を考えるに至ったのか、その誤りの原因を探ることは困難ではないように思われる。Kleiber (1981) は、つぎの文、

(18) Le centre de l'individu est caché.

(19) Le meilleur ami de l'homme est obéissant.

について、つぎのように述べている。

「実際、30)および31)〔本稿の(18),(19)において、名詞句 le centre de l'individu, le meilleur ami de l'homme は、指示的にも記述的にも用いられる。指示的な場合は、話し手はこれらの定名詞句をそれぞれ臍、馬を指示するために用いるのである。記述的に用いるのは、話し手が「人体の中心」、「人間の最良の友」という性質を指示するためである。

30) Le centre de l'individu est caché

a. Le nombril est caché (指示的用法)

b. Le centre de l'individu, en tant que tel, est caché (記述的用法)

31) Le meilleur ami de l'homme est obéissant

a. Le cheval est obéissant (指示的用法)

b. Le meilleur ami de l'homme, en tant que tel, est obéissant (記述的用法)」<sup>(10)</sup>

たしかに、属詞が名詞句ではなく形容詞である(18), (19)のような文においては、主語定名詞句 le centre de l'individu, le meilleur ami de l'homme が、それぞれ、臍、馬という言語外のレベルの指示対象をもつとする解釈も不可能ではないであろう。<sup>(11)</sup> Kleiber, Riegel は、おそらく、この(18), (19)のような属詞が形容詞である文において主語の位置にある定名詞句がもちうる言語外のレベルの指示対象を、問題の文、

(20) Le cerveau est le siège de l'intelligence. [= (16)]

(21) Le nombril est le centre de l'individu. [= (17)]

における属詞定名詞句 *le siège de l'intelligence, le centre de l'individu* にも求めたのではないかと推察される。しかし、属詞定名詞句自体は、言語外のレベルの指示対象をもたないのはあきらかであるから、その指示対象を主語定名詞句に求める結果になった、と考えられる。このことは、すでに引用した Riegel (1985) において、「複合的な定表現 *le siège de l'intelligence* の方は、指示対象が複数個可能であるので、定表現 *le cerveau* が同定する指示対象に付与される性質〔下線古川〕であると考えざるをえない。」と述べられていることからあきらかである。しかし、すでに述べたように、属詞定名詞句 *le siège de l'intelligence, le centre de l'individu* は、「知性の座」、「人体の中心」という言語内のレベルの、ただ一つの指示対象を、言語外のレベルの指示対象と、いわば対等な資格で、もっているのである。

## §5. 定冠詞の機能は指示機能にある

定名詞句が一貫して指示対象をもつ、とこれまで述べてきたが、名詞句ではなく定冠詞そのものの機能に目を転じた場合、当然の論理的帰結として、定冠詞の機能は指示機能にある、と主張することになる。Furukawa (1986) においてすでに述べたように、この主張は、定冠詞の機能は存在前提にあり、とする Ducrot, Kleiber の主張と矛盾しないのである。定冠詞に先立たれた名詞句は、「存在が前提」とされた指示対象を「指示」する、と考えられるからである。先に引用した、Furukawa (1986) に対する書評 Kleiber (1987) の一部をふたたび引用しよう。

「われわれの立場を正当化するには、*Marie est la plus belle femme du monde* のような反例をひとつ挙げるだけで十分である。この場合、定冠詞が指示機能を持ち、指示の同一性をあらわす文である、と主張することは困難である。」

Kleiber の主張に反して、引用文中の文、

② *Marie est la plus belle femme du monde.* [= (4)]

における定冠詞 *la* が指示機能をもつ、と主張することは容易である。*la plus belle femme du monde* が意味する「世界一の美女」という「存在が前提」とされた指示対象を「指示」するために、定冠詞 *la* が用いられている、と考えられるからである。推察するに、Kleiber が、定冠詞が指示機能をもたないことを証明する好例として、文②を挙げているのは、文②とつぎの文、

③ *Marie est très belle.*

が意味的にはほぼ等価である、ということにその根拠があるのではないか、と思われる。たしかに、文(2)と(3)は意味的にはほぼ等価である。しかし、意味的にはほぼ等価であるからといって、一方が名詞句で、もう一方が形容詞という言語表現上の違いを無視してはならないであろう。また、たしかに、定名詞句 *la plus belle femme du monde* は、その記述内容が豊かである。しかし、記述内容が豊かであるからといって、この定名詞句が、定冠詞 *la* の指示機能の故に、指示対象をもつ、ということが妨げられることはない。解釈のレベルにおいて、*être+la plus belle femme du monde* が述語として解釈され、*être très belle* のように解釈されるとしても、言語表現のレベルにおいて定名詞句 *la plus belle femme du monde* がもつ指示性を無視してはならないのである。

## § 6. Kleiber (1981) の指示性の度合い (*échelle de référentialité*) について

ところで、Kleiber (1981) は、定名詞句に指示性の度合いの違いがあることを主張している。この主張は、Kleiber の指示対象の概念の捉え方、および、定冠詞の機能に関する考え方と無縁ではない。本稿における主張は、定冠詞の指示作用は一定しており、定冠詞に先立たれた名詞句であるかぎり、指示性に相違はなく、違いがあるのは、定名詞句全体の指示力の点ではなく、定冠詞をのぞいた部分の記述力 (*force descriptive*) の度合いの点においてである、ということである。

Kleiber (1981) は、文、

(24) *Le nombril est le centre de l'individu.* [= (17)]

をとりあげながら、定名詞句の指示力について、つぎのような説明を加えている。

「名詞句 *le nombril* は、名詞句 *le centre de l'individu* よりも大きな指示力をもっている。何故であろうか。その理由は、名詞句 *le nombril* は、指示対象の存在前提をもった単一の名詞 *nombril* によって構成されているからである。この指示対象の存在前提は、すでにみたように、たとえば *centre de l'individu* のような語彙項目の連鎖には付与されていないのである。したがって、*le nombril* の指示対象が何であるかは、予め分かっているが、*le centre de l'individu* という表現の場合はそうではない。この表現の場合は、複数個の指示対象、すなわちトークンが可能である。このことは、*Quel* をつかった質問が

可能であること (+*Quel est le nombril?* に対して, *Quel est le centre de l'individu?* が可能), および *quel qu'il soit* という表現を従えうること (+*Le nombril, quel qu'il soit, ...* に対して, *Le centre de l'individu, quel qu'il soit, ...* が可能) ことによって明らかである。この結果, 13) [本稿の24] においては, *le nombril* は, *le centre de l'individu* の一つのトークンとして解釈されるのであって, その逆ではない, ということになる。言葉を変えれば, 人体の中心であるという性質が *le nombril* に付与されるのであって, その逆ではない, ということである。<sup>(12)</sup>

定名詞句の指示力についてのこの説明から察せられるように, Kleiber が指示力といった場合に考えている指示の対象は, 言語外のレベルの指示対象である。名詞句 *le nombril* は, 臍という言語外のレベルの具体的な指示対象をもっているが, 名詞句 *le centre de l'individu* は, その指示対象が臍とはかぎらず, 複数個の指示対象が可能であるというわけである。たしかに, 指示対象を言語外のレベルの指示対象にかざれば, *le nombril* は直接的に臍を指示しうるのに対して, *le centre de l'individu* の場合は, 臍を指示するにせよ, 人体の中心という表現を通してであるから, 間接的な指示の仕方である。たしかに, この意味では, *le nombril* の方が, 指示の仕方が直接的である分だけ, *le centre de l'individu* よりも指示力が大きいと言えるであろう。しかしながら, すでに述べてきたように, 指示対象は, 言語外のレベルだけではなく, 言語内のレベルにもあるのである。名詞句 *le centre de l'individu* は, 文24においては, 臍を指示せず, 指示対象として「人体の中心」という意味内容あるいは性質しかもっていないのである。名詞句 *le centre de l'individu* は, 「人体の中心」という意味内容あるいは性質を, 間接的ではなく直接的に, 指示するのである。したがって, 文24においては, 名詞句 *le nombril* と名詞句 *le centre de l'individu* の間には, 指示力の違いはない, ということになる。筆者の考えでは, 定冠詞の指示作用は同じであり, *le nombril* と *le centre de l'individu* の間に指示力の違いがあるように見せているのは, 定冠詞をのぞいた部分 *nombril* と *centre de l'individu* の記述力の違いである。*centre de l'individu* の方が, 複合的な表現である分だけ, *nombril* よりも記述力がある, というのはあきらかであろう。

つぎに, Kleiber が指示性の度合い (*échelle de référentialité*) によって説明できるとする, Kleiber (1981, p. 115) で挙げられているデータをみよう。

(23) a. C'est le nombril qui est le centre de l'individu.

- b. \*C'est le centre de l'individu qui est le nombril.
- (26) a. C'est le chat qui est l'animal le plus élégant.  
 b. \*C'est l'animal le plus élégant qui est le chat.
- (27) a. C'est Paris qui est la capitale de la France.  
 b. \*C'est la capitale de la France qui est Paris.
- (28) Quelle est cette moto?  
 R. Cette moto est l'engin qui nous a réveillés.  
 R. \*L'engin qui nous a réveillés est cette moto.
- (29) Quel est l'engin qui nous a réveillés?  
 R. Cette moto est l'engin qui nous a réveillés.  
 R. L'engin qui nous a réveillés est cette moto.

このようなデータが何を意味しているかについて、Kleiber (1981) は、つぎのように述べている。

「実際、これらのテストが明らかにしているのは、同定力が大きな名詞句はどの名詞句であるか、言い換えれば、指示的な位置を占めている名詞句（論理的な主語）はどの名詞句であるか、また、述語的な意味を占めている名詞句はどの名詞句であるか、ということである。大きな指示力をもった名詞句の方がもう一方の名詞句（上位のタイプ）のトークン（下位のタイプ）であるとみなされるであろう。」<sup>(13)</sup>

この定名詞句の指示力による説明は、説得的ではない。分裂文の焦点の位置に、le nombril はあらわれうるのに、le centre de l'individu の方は、何故、あらわれにくいのか、に対する説明は、Kleiber の定名詞句の指示力という概念では、十分にはなされえないのである。分裂文のデータが示していることは、われわれの言葉で言えば、言語外のレベルの指示対象をもつ定名詞句の方が、言語内のレベルの指示対象をもつ定名詞句よりも、語られる対象、広い意味での主題になりやすい、ということである。しかし、この傾向があるからといって、すでに述べたように、言語内のレベルの指示対象をもつ定名詞句が、言語外のレベルの指示対象をもつ定名詞句よりも、指示力が小さいということはないのである。

分裂文が示すデータは、すでに示唆したように、定冠詞を除いた部分の記述力の相違という説明によって、十分に理解される。定名詞句 le centre de l'individu, l'animal le plus élégant, la capitale de la France は、その表現が複合的であるために、それぞれ、le nombril, le chat, Paris よりも記述力が大きい

ということは容易にみとめられるであろう。記述力が大きいことを le ETRE-centre de l'individu のように記すことにすれば、文(29-32)は、つぎのように、表記されるであろう。

(30) a. C'est le nombril qui est le ETRE-centre de l'individu.

b. \*C'est le ETRE-centre de l'individu qui est le nombril.

(31) a. C'est le chat qui est le ETRE-animal le plus élégant.

b. \*C'est le ETRE-animal le plus élégant qui est le chat.

(32) a. C'est Paris qui est la ETRE-capitale de la France.

b. \*C'est la ETRE-capitale de la France qui est Paris.

b 文は、何故、容認可能でないのであろうか。それは、C'est の次という属詞の位置にあるため、複合定名詞句 le ETRE-centre de l'individu, le ETRE-animal le plus élégant, la ETRE-capitale de la France それぞれの記述力が引きだされて、焦点としての輪郭を失うからである。a 文における複合定名詞句も être の次という位置にあるが、この位置は、記述力が引きだされて「être + 複合定名詞句」全体が述語的に解釈されても、いわば、差し支えない位置であるから、文として容認可能である。

さらに、Kleiber の定名詞句の指示力という概念では、つぎの a 文と b 文の間に容認度の差はない、ということは、説明されえないであろう。

(33) a. Le nombril est le centre de l'individu.

b. Le centre de l'individu est le nombril.

(34) a. Le chat est l'animal le plus élégant.

b. L'animal le plus élégant est le chat.

(35) a. Paris est la capitale de la France.

b. La capitale de la France est Paris.

複合定名詞句の記述力を表記すれば、つぎのようになる。

(36) a. Le nombril est le ETRE-centre de l'individu.

b. Le ETRE-centre de l'individu est le nombril.

(37) a. Le chat est le ETRE-animal le plus élégant.

b. Le ETRE-animal le plus élégant est le chat.

(38) a. Paris est la ETRE-capitale de la Frans.

b. La ETRE-capitale de la France est Paris.

b 文が容認可能であるのは、複合定名詞句が、その記述力が引きだされない主語という位置にあるからである。a 文における複合定名詞句が、être によって

その記述力が引きだされ、「être+複合定名詞句」全体が述語的に解釈されてもよい位置にあることは、(90)-(92)のa文の場合と同様である。

それでは、(88)と(89)のデータは、どのように説明したらよいであろうか。このデータには、質問に対する応答という形式が示しているように、文のレベルを越えた談話上の要因がからんでいる。(88)の二番目の応答が容認不能であるのは、主語 *l'engin qui nous a réveillés* が、談話のテーマではないからである。これに対して、(89)の二番目の応答が容認可能であるのは、主語 *l'engin qui nous a réveillés* が談話のテーマであるからである。では、何故、(89)の一番目の応答は、主語 *cette moto* が初めて現れているにもかかわらず、容認可能であるのか。それは、指示形容詞 *cette* によって、話し手が、いわば一方的に、談話のテーマを設定することが可能になっているからである、と思われる。Kleiber は、(88)、(89)のデータを、定名詞句の指示力によって説明できるとしているが、実際はそうではない。このデータは、名詞句および文のレベルを越えた談話のレベルにおいてしか説明されないからである。本稿で主張している、定冠詞を除いた部分の記述力という説明も、このデータには有効ではない。このことは、もちろん、定冠詞を除いた部分の記述力という説明が名詞句および文のレベルにおいて有効であることを否定するものではない。

## §7. おわりに

本稿は、*Paris est la capitale de la France* の型の属詞構文をめぐる、この型の文が  $a=b$  の等式関係をあらわす文であるのか否か、属詞複合定名詞句が指示対象をもつか否か、より一般的には、定冠詞の機能が指示作用にあるのか、存在前提にあるのか、という問題を論じてきた。このような問題に対する答えは、当然のことながら、定名詞句の指示対象の概念の捉え方によって違ってくる。

本稿では、定名詞句の指示対象として、言語外のレベルの指示対象のみではなく、言語内のレベルの指示対象も存在することを主張した。この区別は、Kleiber (1981) における定名詞句の指示的用法と記述的用法の区別に対応している。しかし、Kleiber は、定名詞句の記述的用法の場合、その意味内容、彼の言葉によれば、性質 (*propriété*) が指示対象になっていることを主張しながらも、本稿で問題にしている論点に関しては、指示対象をもつばら言語外のレベルのものにかぎっている論理的な思考からぬけきってはいない。筆者の考

えでは、定名詞句は、主語の位置であれ属詞の位置であれ、指示対象をもっているのである。Paris est la capitale de la France においては、Paris はパリという言語外のレベルの指示対象をもち、la capitale de la France は「フランスの首都」という言語内のレベルの指示対象をもっている。この文は、主語、属詞定名詞句がそれぞれもつ指示対象が同一であるという  $a=b$  の形の文である。しかし、このことは、あくまでも、言語表現のレベルにおいてであって、解釈のレベルにおいて、est la capitale la France がひとつのブロックとして述語的に解釈されることを妨げるものではない。実際、パリとフランスの首都が同一である、という面倒な解釈をする聞き手はいないであろう。Kleiber (1981, 1983, 1987), Riegel (1985), Ducrot (1972) における Paris est la capitale de la France の型の文の分析の誤りは、この言語表現のレベルと解釈のレベルの混同に起因しているのである。

定名詞句が、主語の位置であれ属詞の位置であれ、指示対象をもつ、という本稿の主張は、定冠詞の機能は指示機能にあるとする本稿の主張につながっている。この主張は、定冠詞の機能は存在前提にあるとする Ducrot, Kleiber の説と、いささかも矛盾しないのである。定冠詞に先立たれた名詞句は、「存在が前提」とされた指示対象を「指示」するからである。

最後に、定名詞句に指示性の度合いの違いがあることを主張する Kleiber (1981) に対して、本稿においては、定冠詞の指示作用は一定しており、定冠詞に先立たれた名詞句であるかぎり、指示性に相違はなく、違いがあるのは、定名詞句全体の指示力 (force référentielle) の点ではなく、定冠詞をのぞいた部分の記述力 (force descriptive) である、ということを示した。Kleiber の主張は、指示力といった場合に言語外のレベルの指示対象しか考えていないことから来ているのである。指示対象のこのような捉え方は、定名詞句という言語表現の分析を誤らせるものである。

## 注

- (1) «Il semble vraiment impossible, ici, de donner à *La capitale de la France* une fonction désignative, ce qui n'empêche nullement l'apparition de l'indication existentielle «La France a une et une seule capitale». Il se trouve même que l'indication d'unicité—souvent assez floue—est, dans les phrases de ce type, tout à fait nette. Car on n'aurait pas l'idée de dire: 7, *Paris est la ville de France qui dépasse le million d'habitants*, à moins de croire, ou de vouloir faire croire, que seule la ville de Paris, en France, a plus d'un million



d'habitants : l'usage de l'article indéfini *un* est nécessaire pour éviter l'indication d'unicité.» (Ducrot, 1972, p. 227)

- (2) Ducrot (1972) が定冠詞の機能が唯一性存在前提 (présupposition existentielle d'unicité) であると主張しているのに対して, Kleiber (1983) は全体性存在前提 (présupposition existentielle de totalité) であると主張している。両者がことなる点は, Ducrot が唯一性 (unicité) と言っているのに対して, Kleiber は全体性 (totalité) と言っている点である。存在前提という仮説を主張する点では, 両者は同じである。
- (3) «Dans le chapitre VI, N.F. propose de définir l'article défini comme un article à fonction référentielle et l'article indéfini comme un article à fonction attributive. Comme toutes les thèses référentielles de l'article défini, il lui faut affronter les énoncés du type *Paris est la capitale de la France* et prouver qu'il ne s'agit pas là d'énoncés attributifs, mais bien d'énoncés d'identité référentielle (de forme  $a=b$ ) où le verbe *être* fonctionne comme copule équative et non comme copule prédicative attributive. Sa démonstration n'emporte pas notre adhésion. Un seul contre-exemple suffira à justifier notre position: *Marie est la plus belle femme du monde*. Il est difficile de prétendre que dans ce cas l'article défini a une fonction référentielle et qu'il s'agit d'un énoncé d'identité référentielle.» (Kleiber, 1987, pp. 244-245)
- (4) 属詞名詞句が不定名詞句であるつぎのような文,  
 a. Ce meuble est un vaisselier. (Riegel, 1985, p. 54)  
 でさえ,  $a=b$  の型の文であると筆者は考える。なぜなら, つぎの文,  
 b. ?Ce meuble est le vaisselier.  
 は, 容認不能であるからである。「この家具」は食器棚の一メンバーであって, 食器棚そのものではないからである。 $a=b$  の型の文でないのは, つぎの例が示すように, 属詞が冠詞をもたない名詞の場合である。  
 c. Marie est actrice.
- (5) «Nous définirons donc *l'usage attributif* d'une description définie comme étant l'utilisation de la description par le locuteur pour référer à la propriété 'le tel-et-tel' exprimée par la description et *l'usage référentiel* comme étant l'emploi de cette expression pour référer au particulier qui satisfait à cette description. Dans les deux cas, la description définie est utilisée pour référer.  
 C'est l'objet de référence qui change: s'il y a usage attributif, l'objet de référence est constituée par la description définie elle-même, c'est-à-dire la présupposition d'existence et d'unicité. S'il y a usage référentiel, l'objet de référence est représenté par le particulier de base ou particulier primaire qui satisfait à la description en question.» (Kleiber, 1981, p. 238)
- (6) «D'abord, un énoncé comme :  
 35) *Mon voisin est le champion du monde d'haltérophilie*,  
 admet deux interprétations également compatibles avec la permutation des deux syntagmes nominaux :  
 36) *Le champion du monde d'haltérophilie est mon voisin*.  
 D'une part, en effet, 35) et 36) peuvent signifier que les deux syntagmes

nominaux ont le même référent. Auquel cas, ces phrases admettent comme paraphrases communes des énoncés qui expriment explicitement l'équivalence référentielle des deux termes :

37) a) *Mon voisin et le champion du monde d'haltérophilie sont une seule et même personne/ne font qu'un.*

b) *Le champion du monde d'haltérophilie n'est autre que mon voisin/  
Mon voisin n'est autre que le champion du monde d'haltérophilie.*

D'autre part, les syntagmes verbaux de 35-36) peuvent s'interpréter comme caractérisant leur sujet au même titre que les expressions prédicatives *est russe, s'entraîne dix heures par jour ou ne suit pas de régime.*» (Riegel, 1985, p. 56)

- (7) 言語内のレベルの指示対象と言語外のレベルの指示対象の区別は、複合定名詞句においてもっとも明瞭にあらわれる。複合定名詞句は、le N の型の単一の名詞からなる定名詞句にくらべて、言語表現としての内容が豊かであるからである。単一の名詞からなる定名詞句においては、この二つのレベルの指示対象の区別は、それほど明瞭ではない。名詞が、具象名詞でない場合や、具象名詞であっても総称的にもちいられている場合には、特にそうである。このことは、ある一つの言語外の指示対象を指すのに、もちいられる名詞という言語表現がいくつあるか、ということに関連があるように思われる。たとえば、Paul というひとりの具体的な人間は、homme, étudiant, voleur, idiot などの名詞によって指示されうるが、amour によって指し示されるものは、単一の名詞では、amour によってしか表現されないのである。総称用法の場合にも、「人間というもの」と言う意味での l'homme は、名詞 homme によってしか表現されえない。このようなことから、二つのレベルの指示対象の区別は、抽象名詞や総称用法の名詞においては、それほど明瞭ではないのである。

いずれにせよ、言語内のレベルの指示対象と言語外のレベルの指示対象の区別は、本稿でとりあげている論点においては、有効な区別である。

- (8) «... si le substantif de l'expression définie *le cerveau* identifie directement et sans équivoque son référent codé, l'expression définie complexe *le siège de l'intelligence*, qui admet une gamme de référents possibles, est nécessairement conçue comme une propriété attribuée au référent identifié par la première expression.» (Riegel, 1985, pp. 57-58)
- (9) «On sait par la-même d'avance quel est le référent de *le nombril*, ce qui n'est pas le cas pour l'expression *le centre de l'individu*. Celle-ci au contraire peut avoir plusieurs référents possibles, c'est-à-dire plusieurs occurrences, comme le montrent la possibilité d'interroger avec *Quel* (cf. *Quel est le centre de l'individu?* opposé à *+Quel est le nombril?*) et celle de se faire accompagner de l'expression *quel qu'il soit* (cf. *Le centre de l'individu, quel qu'il soit, ...* opposé à *+Le nombril, quel qu'il soit, ...*).» (Kleiber, 1981, p. 117)
- (10) «Dans 30) et 31), en effet, les SN *le centre de l'individu* et *le meilleur ami de l'homme* peuvent être employés soit référentiellement, — le locuteur les emploie pour référer au nombril et au cheval —, soit attributivement, parce que le locuteur veut référer aux propriétés 'le centre de l'individu' et 'le

meilleur ami de l'homme':

30) *Le centre de l'individu est caché*

a. *Le nombril est caché (usage référentiel)*

b. *Le centre de l'individu, en tant que tel, est caché (usage attributif)*

31) *Le meilleur ami de l'homme est obéissant*

a. *Le cheval est obéissant (usage référentiel)*

b. *Le meilleur ami de l'homme, en tant que tel, est obéissant (usage attributif)* (Kleiber, 1981, p. 239)

- (11) 指示的用法と記述的用法の区別は、本来、論理的な論争から生まれたものであり、自然な言語使用の場において相対立するような性質の区別ではない。Furukawa (1986) で主張したように、名詞句がもつ指示的部分と記述的部分は共存しうるものである。実際、Kleiber の引用文中にある文 *Le meilleur ami de l'homme est obéissant* における *le meilleur ami de l'homme* が、「馬」という純粹に指示的な用法で、発せられるような場面は想像しにくい。*le meilleur ami de l'homme* という表現を数ある表現のなかから選んでいるのであるから、この表現が馬を指すための単なる符牒にすぎないような状況は考えにくいのである。このようなことがあるにしても、主語の位置にある複合的な定名詞句が指示的部分をもつということも事実である。したがって、「主語定名詞句 *le centre de l'individu, le meilleur ami de l'homme* が、それぞれ、隣、馬という言語外のレベルの指示対象をもつとする解釈も不可能ではない」とした所以である。
- (12) «Le SN *le nombril* a une force référentielle plus grande que le SN *le centre de l'individu*. Pourquoi? Parce que le SN *le nombril* est constitué d'un substantif simple *nombril* auquel s'attache une présupposition d'existence référentielle, qui, comme nous l'avons vu ci-dessus, n'est pas liée aux séquences d'items lexicaux comme *centre de l'individu*, par exemple. On sait par là-même d'avance quel est le référent de *le nombril*, ce qui n'est pas le cas pour l'expression *le centre de l'individu*. Celle-ci au contraire peut avoir plusieurs référents possibles, c'est-à-dire plusieurs occurrences, comme le montrent la possibilité d'interroger avec *Quel* (cf. *Quel est le centre de l'individu?* opposé à *\*Quel est le nombril?* et celle de se faire accompagner de l'expression *quel qu'il soit* (cf. *Le centre de l'individu, quel qu'il soit, ...* opposé à *\*Le nombril, quel qu'il soit, ...*). Il s'ensuit que dans 13) *le nombril* sera interprété comme étant une occurrence de *le centre de l'individu* et non l'inverse. En d'autres termes, la propriété d'être le centre de l'individu est attribuée à *le nombril* et non le contraire.» (Kleiber, 1981, p. 117)
- (13) «Les tests révèlent en fait quel est le SN qui a la plus grande force identificatoire, partant, quel est le SN qui occupe la place référentielle (sujet logique) et quel est celui qui occupe la place prédicative. C'est le SN qui a la force référentielle la plus grande qui sera considéré comme étant une occurrence (type inférieur) de l'autre SN (de type supérieur).» (Kleiber, 1981, p. 116)

**Références**

- Ducrot, O. (1972): *Dire et ne pas dire*, Paris, Hermann.
- Furukawa, N. (1986): *L'article et le problème de la référence en français*, Tokyo, France-Tosho.
- Kleiber, G. (1981): *Problèmes de référence, descriptions définies et noms propres*, Paris, Klincksieck.
- Kleiber, G. (1983): "Article défini, théorie de la localisation et présupposition existentielle", dans *Langue française*, 57, pp. 87-105.
- Kleiber, G. (1987): Le compte-rendu de Furukawa (1986), dans *Revue de linguistique romane*, 51, pp. 243-246.
- Riegel, M. (1985): *L'adjectif attribut*, Paris, PUF.